寿で暮らす人々　６８

　自治会役員の思い出の断片　（その２）管理人さんたち

　管理人さんは、多くはご夫婦で勤めていました。当時の管理人さんは、単身の働き盛りの港湾や土木の労働者、0歳から中学生までの育ち盛りの子どもたちを育てている労働者所帯、傷病者や薬物、アルコール依存症の人たちなど様々な人々と24時間対応していました。

　簡易宿泊所は旅館ですから日々家賃を徴収しなければなりません。廊下やお手洗いの清掃と大忙しの毎日です。急病の人、喧嘩の仲裁、金銭が絡む相談、区役所や様々なところからの問い合わせの応対など、日々大忙しの毎日です。ドヤは玄関に鍵をかけていません。24時間出入り自由です。宿泊している人の部屋にドヤのない友だちが時に泊まることなどもあります。この当時の管理人さんはよろず相談を一手に受けていたと思われます。管理人さんの仕事は、大変だけど面白かったのではないかと思います。僕の仕事柄、多くの管理人さんと接し魅力的な管理人さんご夫婦に多く出会いました。管理人さんの中には、寿福祉センター保育所に子どもさんを預けている方も多くいました。管理人さんのうち朝日さんは、大柄で親分肌の気さくな人柄で役員の中でも存在感を放っていました。八木沢さんは、寿での生活も長く、子どものいる所帯も多く入っている熱海荘という大きなドヤの管理人さん。宿泊者の相談には親身になっていました。八木沢さんは、自分のドヤだけでなく寿ドヤ街の関係の方たちに信望の厚い方でした。御園さんは、お子さんを交通事故で亡くされて、医療機関と裁判をしていました。それだけに寿の人が差別されることの痛みには人一倍心を痛めていました。三井さんは、在日の方で、日本人の奥さんとの間に３人のお子さんがいました。日本人と違う視点や感性で意見を述べていました。

　この頃は、寿地区の生活保護を担当するSWは７～８人ほどでした。現在の７０人ほどの人数と比較すると大きな時代の流れを感じさせられます。当時は、日雇労働者の町、現在は、６０歳以上の方々が人口の５０％以上を占めています。生活保護受給者数は、５，５００所帯を超えています。当時は、管理人さんの存在とその役割は大変大きかったのではないでしょうか。当時、それが当たり前と感じていたので管理人さんお仕事を深く知ろうとはしませんでした。今、当時の管理人さんがどんなお仕事をしていたのか詳しくお聞きしていたら、寿で暮らす人々の生活の実情が、より一層理解できていたのではないかと思います。残念の極みです。

　昭和５３年５月の全日本海員組合の港湾ストライキの時、長引くストで、寿の日雇労働者は仕事がなくて大変困りました。特に子供がいる所帯では、影響は大きく子どもたちへの食事に事欠く有様でした。自治会として緊急に１，０００所帯余の方々にパンを配布しましたが、その中心を担ったのは、管理人さんたちでした。管理人さんのつかんでいる情報をもとに、配布することができたのでした。

次回　自治会役員の思い出の断片　（その３）　食堂店主たち